

田中富雄と「徳島作家」

田中富雄が本格的に文筆活動を始めたのは昭和二十一年十二月。徳島市内に焼け跡の広がる戦後間もない時である。食べ物を始め品物が極端に不足していた時代。戦地以来の朋友である徳島日々新報の井上銀晴氏の好意で、余ったロール紙の端を回して貰い、ガリ切りをして発行した。誌名は「あしぶえ」。その後「葦笛」「徳島文芸」と改題し、昭和三十三年十一月に「徳島作家」は創刊された。当初からの会員に岡田みゆき、橋本潤一郎、松崎慧、岸文雄がいる。

「徳島作家」は創刊当初から県内はもちろん、全国的にも話題を呼んだ。昭和三十四年八月に発行した3号掲載の橋本潤一郎「拳銃」が、「文学界」の同人雑誌評に「すぐれた作品」として推薦され、三十五年一月発行の4号掲載田中富雄「生口記」が、全国同人雑誌最優秀作品として「文学界」に転載された。この作品は多くの話題を呼びながらも表に出る機会はなかつたが、田中富雄の終生の傑作として語り継がれている名作である。

続いて5号掲載の岡田みゆき「石ころ」が、「文学界」転載の後、芥川賞候補となつた。幸運はまだまだ続き、6号、7号に連載した中川静子「幽囚転々」は、加筆して「オール読物」に投稿して新人賞を取つた後、直木賞候補となつた。同人の誰が何時中央に踊り出てもおかしくない勢いだつた。

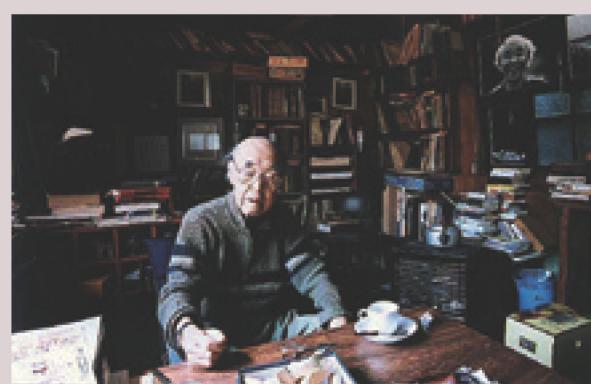
全國にも通じるベテラン作家を抱えていることに満足せず、新人发掘にも力を注ぎ、書けそうな人を見つ

けては勧誘した。年一回程度のペースで発行される「徳島作家」は非常に敷居が高く、書けば載せられるといふものではない。富雄を中心とした五名ほどの編集委員によつて厳しい審査が行われた。容赦なく欠点が指摘され、書き直しを命じられる。二度三度と書き直す根性がなければ生き残れない。やつと閑門を通つて掲載されても、合評会という関所がある。一つ一つの作品の欠点が丁寧に暴かれていく。容赦なくすたずたに切り裂かれる作品に、新人はほとんどが泣いてそれきり止めてしまうほどだった。しかし、「徳島作家」に掲載される作品は、そのレベルに達していると認められたからであり、同人の熱心な批評に耐え得る作品なのである。そこまで到達できない作品も多くある。二度三度と書きなおしても、「徳島作家」のレベルに達しない作品のために、富雄は「連弾」を発行した。自身も「徳島作家」に載せるほどでもないと気軽に作品を書いて掲載し、新人の作品もここで拾い上げた。このような試練をくぐつて、「徳島作家」は全国でも名の知れた優秀同人誌に成長した。「所属は何処ですか?」「徳島作家です」「ああ、あの……」と、とたんに敬意の眼差しで見られる。ここですと修行をして、ずっと書き続ければ、やがては認められて、憧れの作家デヴューが果たせるかもしれないとの希望のある苦行であった。

「徳島作家」の書評は、毎号徳島新聞の文化欄に三分の一ほどのスペースを取つて大きく報道された。富

永記者が書くこともあり、保科千代次氏や山下博之氏らが担当することもあつた。一つ一つの作品が丁寧に批評されるのではなく、主だった作品がスペースの大半を占め、後の作品はちょこちょこと触れ、無視され全く話題にならない作品もいくつかある。大きく取り上げられれば嬉しいし、無視されれば悲しい、当然の宿命と受け止めながら、次回は! との決意に変わり、また新しい情熱を搔きたてて次の作品に挑むのである。同人は誇りを持っており、いつかは! という希望みを捨ててはいなかつた。まずは「徳島作家」に掲載されること、徳島新聞始め、朝日、毎日、読売などに「今月の同人雑誌評」欄で大きく取り上げられることがある。最終は全国同人雑誌最優秀作として、「文學界」に転載されることだ。そうなれば、芥川賞候補も直木賞候補も夢ではなくなる。地方の同人雑誌を通して世に出る機会があつた時代だつた。どんどん大きな集団を牽引し、指導しながら富雄は自身も毎号書き続けた。「鼠」「捨身—聖徳太子の生涯」「鬼火」「流転—額田女王の生涯」など、日本の古代に題材を取つた大作を次々に発表した。

昭和三十三年に創刊された「徳島作家」は、多少の出入りを繰り返しながらも、田中を始め、岡田、中川、橋本、岸、松崎など堂々たる幹部が立派な作品を書いて「徳島作家」を支えてはいた。が、だんだん年齢を重ねていくことで、マンネリ化は否めない。そんな折、颯爽と登場したのが室戸光平であつた。昭和四十七年18号に「森」、19号に「町」、そして四十八年20号に発表した「乙」で、同人を「あつ」と言わせた。久々の大型新人に一同は湧いた。うずうずして一同間に熱風を吹き込んで余りあつた。そして「乙」は、久し振りに「文學界」に転載された。芥川賞か? と一同



田中富雄 (たなか・とみお)

大正7年（1918年）3月7日～平成16年（2004年）12月17日。小説家。徳島市に生まれる。少年時代に詩作を始め、漢詩・俳句を作る。昭和14年、文部省教員検定試験に合格し、教師、私塾を経営。秋涼平のペンネームで詩を発表する。20年11月、短詩型文芸誌「葦笛」（後に「徳島文藝」）を創刊。31年には、「北灘炎上」「祖谷の秘曲」を「徳島新聞」に連載。「畜銭叙位」がサンデー毎日百万円懸賞小説候補となる。同年、JR作家クラブを結成。33年、徳島作家の会を主宰。翌年、「生口記」が「文學界」に転載される。52年、徳島作家協会を結成。「血の記憶—小説・蘇我入鹿」で第1回歴史文学賞佳作を受賞。55年、阿波の歴史を小説にする会を結成。会長に就任。徳島県の出版、文化に貢献し、徳島県出版文化賞、徳島新聞文化賞、地域文化功労者などに選ばれた。徳島県立文学書道館常設展示作家。

著書

- 『祖谷の秘曲』徳島新聞出版部、昭和31年5月刊。
ラジオドラマ集『ええじゃないか』徳島作家の会、昭和43年6月刊。
『北灘炎上』徳島県教育委員会、昭和46年6月刊。
『岡田佐代藏伝』岡田組、昭和53年11月刊。
『妬心繡帳—天寿国繡帳始末—』徳島出版、昭和56年1月刊。
『革新の女帝—皇極・齊明天皇私伝—』創芸出版、昭和61年8月刊。
『蒙古襲来 念仏水軍記』叢文社、昭和62年4月刊。
『回想・徳島作家の40年』徳島出版、平成11年7月刊、ほか。

参考文献

- 『田中富雄作品解説事典』田中富雄を顕彰する会、平成18年3月刊。
『四国近代文学事典』和泉書院、平成18年12月刊。



全国的にも知られた「徳島作家」

は色めきたつたが、そうはいかなかった。会員揃って「次作は！」と祝杯を上げたのであつたが、室戸光平は三作で力尽きたのか、それ以降作品を書かなくなつた。

平成に入り、ワープロやパソコンが普及し始めると、自分の作品が活字になつて本になるということがそう珍しいことではなくなってきた。簡単に自分で打ち込み印字ができる。若者の本離れが急速に進む。劇画、アニメ、携帯小説と世の中はめまぐるしく変化し、全国から同人雑誌がどんどん消えていった。平成十六年56号竹内菊世「木偶頭断章」が、久方振りに文學界の同人雑誌評に取り上げられて気をよくしたが、まもなくしてこの欄はなくなり、現在は「三田文学」に引き継がれている。

富雄は体調を崩し、長年力を注いできた主宰の座を岸文雄に譲り、自分の書きたいものを命ある限り書き

続けようと決心する、人工透析を続けながら、意欲的に「徳島作家」に作品を発表し続けた。有力な書き手だった中川静子が持病の肺結核で倒れ、岡田みゆきも入院し、相次いで亡くなつた。傷心を抱えながらも富雄はまだまだ書きたいこと、書かねばならないことがあり、意欲も十分ではあつたが、薬石効なく平成十六年56号の、「続・万葉多恨」第一回が絶筆となる。平成十七年57号を「田中富雄追悼号」として発行した後、残された同人たちで、「徳島作家」の今後をどうするかを話し合つた。別の主宰を立てて継続しようとの意見もあつたが、「徳島作家」は田中富雄の最大の傑作として、世に残すこととし、58号を以て終刊することにした。偉大なる田中富雄の「徳島作家」は、

平成十八年三月、四十八年間の歴史を閉じた。

（竹内菊世）

田中富雄作品の時代別分布

時代	作品
弥生	脱出、生口記
古墳	男狹磯
飛鳥	流転—額田女王の生涯—、捨身—聖徳太子の生涯—、妬心繡帳、鼠、血の記憶、畜銭叙位、陰謀の血、改新の女帝
奈良	萬葉多恨、続萬葉多恨、虹と防人、三人の防人
平安	阿波飢う、富売の悔い
鎌倉	蒙古襲来念仏水軍記
室町	大仏遷座
戦国	夢の鞭—小牧・長久手の戦い—
安土桃山	姫若子変身、祖谷の秘曲、謀略の餌、自縛の計、内助の悔い、血で汚された池
江戸	北灘炎上始末記
明治	愛藍記、阿波のデコ忠、仁医二代、落陽
大正	奇蹟、道ひとすじに—土屋憲治
昭和	夕焼—等兵戦死、雪と兵隊、兵隊と少女と柿の実と、後部にて、ささやかな復讐（戯曲）、天からの歌（戯曲）

田中富雄はあらゆる時代を舞台に小説を書いた